



ドゥビドゥビドゥ

do-be-do-be-do

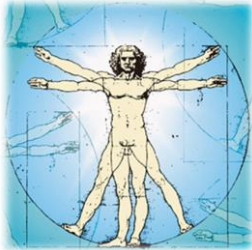
永田円了

古代ギリシャの哲学者、ソクラテスは、“To be is to do” “～存在は行動なり～”といひ、仏哲学者、サルトルは、“To do is to be” “～行動は存在なり～”、といった。そしてこの論争に決着をつけるべく、フランク・シナトラは、do-be-do-be-do と歌った。

人間を英語で、human being と呼ぶ。human とは、他の動物の行動と比較しての人間であり、being とは、その存在そのもの、のことである。となれば、human だけでもいいものを、何故 being をつけたのか。今回のテーマは、まさにこの問いを明らかにしてみたい。

外側 (do) からか、内側 (be) からか

禅僧・道元は、悟りに至ることを「身心脱落(しんじんだつらく)」と表した。この表記にちょっとした論争があった。「身心」なのか、「心身」なのか。どちらも、「しんじん」と読むが、身体、すなわち形から入るのか、心からはいるのか、の論争である。道元の思いは、形から入ることを意味する「身心脱落」であった。この教えは、禅僧堂の修行のスタイルになって今に至っている。



役作りに関して、女優シャーリーズ・セロンは、肉体面からの役作りをすすめ、ちょっとした身体の変化が、生活全体に影響を与える、と言う。メリル・ストリープは反対に、内面からの役作りを優先し、役に心を通わせなければ、結局は失敗すると力説した(Actor's Studio より)。

めざすゴールが同じであるなら、この違いは単にアプローチの違いなのだろうか。ハーバード大のエイミー・カテイ教授は、このプロセスの違いが人生に大きな影響を与えると述べる。はったりでもいいから、自分を大きく見せることで、人の内面がその大きさになっていくというのである。英語で、Fake it till you become it. という言い方がある。自分の内側の力をおおいに発揮したいのなら、まず外側を大きくしなさいと言う。「水は方円の器にしたがう」という孔子の考えに共通するものである。

“be” のちから

do に対し、be は静かである。何もしないでそこにいること。しかし、肝心なことは、どのような意識をもってそこにいるのか。米国の神話学者・ジョセフ・キャンベルは、この状態を「静かな場所」、ニルバーナ、と呼ぶ。Do (行動) で自らの価値を表そうとするアスリートですら、一流であればあるほど、この「静かな場所」を持つという。

人間は、do が花開く青壮年期を経て、be がいぶし銀のように、存在価値をもつ過程を経験する。なんにもしなくても、できなくても、ただあなたがそこに居るだけで、周りに影響を与える存在になるためには、多くの do と、Aha! を体験しなければならないのだろう。

<事例 DVD>

シャーリーズ・セロン/外面からの役作り
 メリル・ストリープ/内面からの役作り
 高倉健/映画『駅』より、無言での存在感
 クリント・イーストウッド/沈黙の効果
 スーパープレゼン/Amy Cuddy, “Fake it till you become it.”
 鷲田清一/中川幸夫の生け花、しおれた水仙を生ける
 正岡子規/病床にても、心は世界を駆けめぐる
 ブルース・リー/空は力なり、水は方円の器にしたがう
 田中泯/動くだけがダンスじゃない
 ジョセフ・キャンベル/静かな場所 ニルバーナ
 白隠禅師/富士大名行列図 2人が富士山を見ている
 茂木健一郎/アイデアがやすい場所
 映画『グリーンデスティニー』手に触れるものは永遠ではない...
 歌・フランク・シナトラ/Strangers In The Night, dobedobedo
 絵本、ゴッデン作『ねずみ女房』

円了のホームページ: www.enryo.jp

